

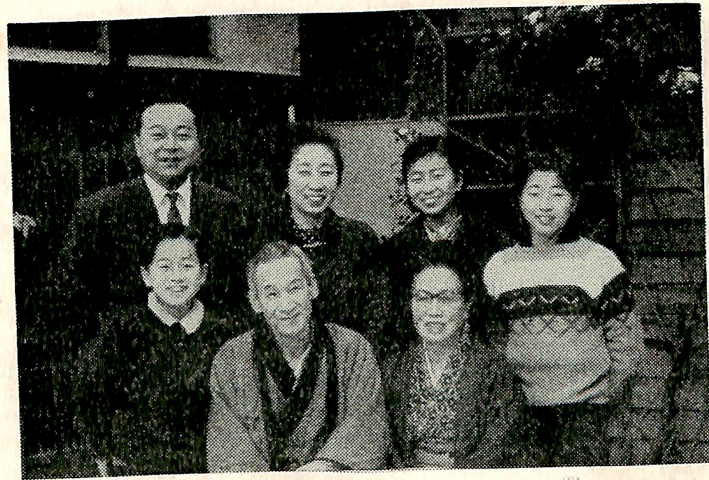
昭和二十四年七月二十三日発行（三種郵便物認可）
 昭
和
四
十
四
年
七
月
二
十
三
日
發
行
（
每
月
一
回
・
十
五
日
發
行
）
可

（通第一九八号）

慈光

第十七卷 第十一号

目	病床慰問の書簡	近角常観	(2)
	安心消息	光遠院恵空	(5)
八遺稿	病人の心・癌を病む人へ・書簡	福田鉄雄	(10)
	初七日を迎えて	福田輝子	(18)
菜園の家		福島政雄	(19)
	福田鉄雄氏を悼む	白井成允	(20)
	福田さんをおくりて	岩本正樹	(22)



昭和四十年一月七日 盛岡市菜園二丁目六ノ八の御自宅で、奥様、御子様、御孫様に取り囲まれた福田先生の御姿であります。前列左からお二人目。

まえがき

去る九月、福田鉄雄先生はお亡くなりになりました。ただ念仏一つになりて君が行く

永劫の道われも辿らむ

とは福島先生が御病床におくられたお歌であります。文字通り尽十方無碍の光明と一味になられ「連続無窮」の御働きをもって、残る私共を護念下さることであります。先生は旧制二高時代から道交寮で仏縁を恵まれ、東大薬学部時代に近角先生のお導きを受けられました。御卒業後、大阪の塩野義製薬、のちに岩手医大につとめられました。十八年前から肺疾、次いで心臓病、最後に胃痛、と、現代人の最も怖れて居ります三大病をすべて身につに受けられながらも、一日一日を大切に過ごされ、遂に医学の限界を越えてしずかに浄土に還られました。其間、歎異鈔の二章と九章とを渴仰し続けられました。良寛師の句に
盗人にとりのこされし窓の月
とありますが、一切のものが崩れ去る世に、皎々と輝やく念仏無碍の月光を讃仰された御一生でありました。謹しんで御別れを惜しみ、御遺稿を頂いて私共への導きを頂きました。

△編者 しるす▽

病床慰問の書簡

— 安波勲八氏癩の病床へ —

近角常観

謹啓、仕候。

御病気の報を拝承仕り候てより既に久しく相成、諸方面より御容態を拝承致しながら、御見舞状をも差し上げ申さず、何とも申上様なき次第に御座候。

御難症たるにもかかわらず、御天職に御尽瘁遊ばされ、御精進中の御様子拝承仕り候ため、不可思議の信徳を渴仰讃嘆のあまり、遂に懈怠に相成り候段、まことに以て懺悔慚愧の外これなく候。

拜承仕り候えは此頃は御平臥の趣、如何ばかり御心づまりし御事と存じ奉り候。平素より十分御安心の御事と存じ候えども、先ず何よりも申上げたきは、歎異鈔、第九章、唯円房に対する聖人の御教化に候。

定めて御病氣重りたまいては唯円房の御尋ね、定めて御心の有りのままと存じ候。しかも念仏申され候も、定めて平素の如き踴躍歡喜の心も御おるそかに候わんと存じ候。勿論急ぎ浄土へ参りたしと思召されざるのみならず、ま

すます心細く思召したまわんと存じ候。

然るに聖人は、親鸞もこの不審ありつるに勲八同じ心にありけりと被仰候。

仰せの如くよく／＼案じみれば、天に踴り地に躍るほどに喜ぶべきことなるに、喜ばれぬ我等なり。聖人喜ばずともよしと宣うにあらず。若し喜ばずともよし位のことなれば、勿論喜ばれずともよしとは云え、喜ぶにすぎたることなし、同じことなれば喜びたしとの望みあるべし。

しかるに聖人は喜ばずともよしと宣えるに非ず、喜ばぬにて往生は一定と仰せられ候。若し喜ばれたら往生は不定なるべしとの意に候。

それはまたあまりに極端と思召し候わんかなれど、現に口伝鈔には「三毒もいたく興盛ならず、善心しきりに起らば、往生不定の思あるべし」と仰せられ候。

たとえば天災地変等のありたるとき、慈善の配給品を与えられしとき、代価は払わずともよきかというに、勿論慈

善なり払わずともよし、というも一応の答なり。しかれども徹底的に答うるには、払えぬものにこそ与うべけれ、若し払える人には与えざるなり。慈善品は代価の払えぬにてこそ与うるなりと申さねばならぬ。

今も喜ばずともよし位のことにあらず。若しその様に病篤きとき喜べるならば、煩惱具足の凡夫に非ずやと思ふゆゑに、かえつて往生不定なり。喜べぬ処を察したまいて、これを可愛想に思召し下さるが如来の御慈悲なれば、喜べたらばかえつて往生不定、喜べぬにて往生は一定との仰せに候。

何故なれば、喜べぬは煩惱の為に押えられたるなり。しかるに仏かねてしろしめして、その喜ばれぬ煩惱具足の凡夫を仰せられ候ことなれば、かくまでの大慈大悲にてましますかと覚えて、いよ／＼たのもしくおほゆるものなりとの御教化に候。

特に、次の一段の、また急ぎ浄土へ参りたき心のなくていささか所労のこともあれば死なんずるやらんと心細くおほゆることも煩惱の所為なり、とは、如何に聖人が勲八君を察して御教化下さることと存じ候。

不肖等、この心持は深くいただき味い居り候えども、未だ重病の實際に遭遇せざるために、甚だもつて横着至極に御座候。しかし無常迅速なることは、我や先、人や先、

出でぬことを特に憐みたまうか」と喜び申され候。

恐らくは私が色々只今御教訓を受け候事と存じ候えども色々御病床の事御察し申上げ、歎異鈔第九章の意を告白、見舞申上げ候。返す／＼も大慈大悲の御親心を益々お喜びあらせられたく候。

嗚呼回顧仕り候えば、不可思議の御因縁にて共に御同行御同朋として、如来大悲の御恩を喜び候。兄は今や蓮華蔵世界の如来の宅門に入りて、極楽世界の屋門をきわめたまいて、直に蘭林遊戯地門より出でて、我等を教化したまうべし。

明日の夜は照りますものと知りながら

入るさの月の惜しくもあるかな

何れは浄土に再会、または還相廻向の御身となりたまうと存じ候えども、実に名残り惜しきわみに候。唯信鈔にも「今生夢の中の契をしるべとして、来世さとの前の縁を結ばんとなり、我おくれなば人に導かれ、我先立たば人を導かん。生々に善友となりて共に仏道を修せしめ、世々に知識となりて共に迷執をたたん」とこれあり候。

今生、後生共に同一念仏の御縁によって、四海兄弟の契を得候こと、何よりの感謝に御座候。和才君より御来示の碑銘、両三日中にお送り申上ぐべき候。 頓首

大正十五年

近角 常観

今日とも知らず、明日とも知らず日暮し致し居り候。然れども貴兄の如き實際に遭遇したまう今日の御境遇は如何に心細く御思召し遊され候ことと御察し申し上げ候。

我御慈悲をいただきてより約三十年、いまだ毫も早く浄土へ参りたしなど微塵も思わず、よく／＼煩惱の興盛と存じ候のみならず、未だ死なんずるやらんと心細くだにも思はず。今や御身は如何に心細く思召すらん。御専門の研究といい、御妻子に対する愛着といい、無量々々の御心緒お察し申し上げます候。

しかるに聖人は、所勞（やまい）のこともあれば、死なんずるやらんと心細く候べしと御察し下され候。いかにも大悲深重の御慈悲と存じ候。名残り惜しく思いながら娑婆の縁つきて、力なくして終るとき、彼土において深き夢さめ、生死の夢さむる時、弥陀同体の御覺りと存じ候。それまでは一向苦しみの凡夫に候。若しこの苦を受けざるならば凡夫の数に入らず、我等凡夫たらん已上は、臨終の最後まで名残り惜しくして力なくして終る次第に候。

或人、私にたずねて曰く「力なくして終るとき、念仏称えられずともよろしきか」と。予曰く「念仏称えられぬが当然なり、その称えられぬのを特に憐みたまうなり」と。其人流涕して曰く「先日以来病苦のために念仏出でず、人また念仏の出でぬを憂いてくれ候。しかるにその念仏の

安波 勲 八 殿

御 病 床 下

空の袋を出されての近角先生のお示し

我々はうつろな心を何とか満たそうとして、物に人に求め／＼てさまようけれど、何時まで立ってもうつろは満たされぬ。信仰上のことでもその通りで、何とかして信心を得たい、喜びたい、よくなりしたい、しっかりしたいと求め廻るけれど駄目である。

ところが仏のお救いは、そういう何処までいっても、どんなにしても満たされることのない空っぽの心を見抜いてその空の袋の底から、可哀想である、不憐であると無限に慈悲を注いで下さる。袋の底から逆に仏のまことをもって満たして下さるのである。

向うにあると思つた光が、後ろからドツと輝いて下さる飢え渴いた者が、前方に一杯の水を求めて、その得られないことを歎き悲しんでいる者に、後方から思いもかけず沢山の水が押し寄せて来たと同様である。

この如来の廻向は、我々の求める方向とは逆である。

(柳瀬留治氏より聴記)

安心消息

光遠院 惠空

先度は対面つかまつり候ところに、御本復の御姿、目出度候。さては聖教の抜き書、御約束つかまつり候。除なき身に候ゆえ、しどけなく候えども貴命にまかせ候。

ついにはこのたびを御臨終とおぼしめしきわめられ候ゆえ、とりつめて催促などと仰せられ候は心細く、又は御名残りのほどもかねて思わるるばかりに候。見過しがたく書き候えは長くなり候。おり／＼に御聞あるべく候。

それにつき候ては、かよりの事のぞみて御聞き候わんも結句いまめかしく(今さらことあたらしく)、又御往生を御のぞみ候御心中も、ゆるげに覚え候。今度の往生を何のさびしき事候てか、わずらわしく仰せ候らん。

又御相統の為と候は、目出度く候えども、それは平生わざなき時の事に候。御覚悟のごとく、今は後を期すまじき御身、老後と申し、御病中と申し、余の事は御耳に入るべしとも覚えす候。いわんや御心にかかり候べしとおもいもよらず候。ただ一向御念仏のみにてぞ、往生を悦びたま

うべしと覚え候。

兎ても角てもありなんと思ふことにこそ懈怠もすれ、決定のがれがたきは無常なり、まどろまば夢にみるほど、ねさめば仏を念すべきなりと候。又永観は「往生ちかきにあり、念仏なんそうまん」といさみたまう事に候。

宿善目出度して、平生業成の御身の上にて候えは、今は領解もいらす、心得もいらす、信心の有無、往生の得不いとむかしは一昔の御事に候、あなかしこ。

臨終のちかづくを喜ぶまでの心はおこらずとも、御命かぎり候わば、かねて証得したる往生、その時あらわれ候べし、更に障りあるべからず。何事もなげかしげなる御いろめ(模様)ゆめ／＼益なく覚え候。

もとより往生は疑なくおぼしめしきわめられ候えども、妄念、妄執とどめがたく、或は眷属お／＼立ちまじわり、せめくる世話に隙なくて、喜びもたえ／＼に、念仏もわすれがちに、うつ／＼と御すぎ候ことを、御いたみ候条、こ

れまた目出度き御用心、御もつともの御覚悟に候。善導の『臨終正念訣』と申す書に明かにみえて候。かく目出度くは候えども、今すこし御心の足らわぬやと不足に覚え候。

そのゆえは、三毒の煩惱はしば／＼おこれども、顛倒の妄念はつねにたえざれども、まことの信心はさええられずと候えは、妄念をこそさまたぐれ、さらに妄念にさまたげらるる信心歡喜の念仏とはうけたまわらず候。あるやなしやのよしあしに筋もなく乱れ散る時も、かかる浮世のわざを永くすてて、涅槃のみやこにいたるものと、うちなぐさめば、この信心の風に妄念の雲晴れて、歡喜の月あざやかなるをや。

先徳の云く「落葉しば／＼つもれば水よどむ、妄念しばしばおこれば願心熾盛なり」と。されば恩愛ころをなくさめて知識となる。我と障りに思いなす条、後世を思う心のよわきがいたすところか。堯阿法師のいけるように、「おこらばおこれ」と、うちすてたまえ。それをおこさじと相手になりたまえば、敵はつよく、力はよわし、われとかなう道にあらず。よしや思うようにたしなみえたりともそれは後世のたよりにはならじ。

聖人の云く

「凡夫というは無明煩惱われらが身にみち／＼て、欲もお／＼、いかりはらだち、そねみねたむ心お／＼ひまな

くして臨終の一念にいたるまで、とどまらず、きえず、たえず」と、水火二河の喩にあらわれたり。

又、家の犬の打てどもさらぬにたと。されば土の馬を洗いきよむとも、わが身の貪瞋妄想を清むべきことかたし故に恵心(源信)の云く、

「妄念は凡夫の地体なり、妄念の外に別に心は無きなり臨終の時までは一向妄念の凡夫にてあるべきぞと心得て念仏すれば来迎にあずかりて蓮台に乗する時にこそ妄念をひるがえしてさとり的心とはなれ」といへり。眞常ごんじやうに投ぐる石の金となるがごとく、視聽の

ふるるところしかしながら解脱の良縁、親疎眷属みな後生の善友なり。しかるに、それゆえに心うつり、憶念たゆるなど、ものに過とがをゆずるとは、もののがにはあらずして我心のたらぬ過なり。

そのうえ、やめんためにてもあれ、又おこさんにとてもあれ、我悪心の方へ目の行くは、他力にうとときがゆえにて候。その故は『後世物語』に云く。

「ある人の云く。念仏すれども心に妄念おこせば、外相げさうは尊くみえて、内心はわるきゆえに、虚仮の念仏となりて真実の念仏にあらずと申すこと、誠にとも覚えて、思いしずめて心をすまして申さんとすれども、我心つや／＼調べがたく候をばいかがつかまつるべきや。

師の云く。凡夫の真実にしなして行ずる念仏は、ひとえに自力にして弥陀の本願に違ふところなり。すでに自心をきよむというならば、聖道門の心なり。今の凡夫みずから煩惱を断ずることかたければ、妄念またどめがたし。しかるを弥陀仏これをかなしみて、かねてかかる衆生のために、他力本願をたて、名号の不思議にて、罪を除かんと誓えり。さればこそ他力とは名づけたれ。我心にてもものうるさく妄念をとどめんとたしなまず、乱れ散る心をしずめんとせず、唯仏の名願を念持すれば、本願かぎりあるゆえに、貪瞋痴をたたえたる身なれども、必ず往生すると信じたればこそ心やすけれ」と又、法然上人も

「今時往生をねがう人、おのがゆゑしき妄念をやめて申すこそ真実の念仏とはなるなれと思ふゆえに、他力をたのむといえども、心には自力をはげみて生死の旧里にながくめぐるなり。かくのごとき人は頭の火を払うがごとくすれども、身心をついやして、その益さらになし」といえり。

かるが故に、妄念妄想のやまぬなどいう気づかいをやめて、その心を本願の方へ引向けたまうべし。

かくまでは、内々も御領解にて候わんずれども、なおも妄念に足をまかれて、これさえなくばと思はるるよりして

ぞ申すべき。信というは疑に對する心にて、疑なきを信とは申すべきなり。その信のうえに、歡喜隨喜などもおこらばはすぐれたるにてこそあるべけれ」已上。

かるが故に、善知識は、虎に角をいただかせたる如くと云えり。むかし唯円房のかくなげかれしを、聖人の「親鸞もこの不審ありつるに」と仰せ候いしこそ、身にあまりておぼえ候。およそ喜びのおこらず、念仏の申されぬを歎くに二つのすじあるべし。

一つには、喜ばず念仏せねば往生不定と思つて歎く機あり。すなわち『見聞集』に云く

「往生の定まるしるしには慶喜の心おこるなり。乃至よくよく心のうちをかえりみて、慶喜報恩の心あらば、往生すでに定りぬとしるべし。しからずば往生不定なり。これ行者の用心なり、よくわきまうべし」已上。

これによりて喜びをたてにはつかねども、喜ばぬによりて信心のあつくもなきほどの思いしらるるよりして、さすがに不定とまで、さしあててつよくは疑わねども、何とやらん心がかりにて、うち晴れもせぬ心地するなり。何時かうらく（はればれ）となりてと願うなり。されば信者を余所におきて、我はその内にてなきように思われて、あわれよくなれかしと、歩みよるようにはげむなり。これ悲しき覚悟なり。

この貪瞋妄念をやめばとしかかりたまうから、子も孫も、視るも、聴くも、みな妄愛のたよりとなれり。されば、その心中を余所よりみれば、また／＼妄念と手あいして、力相撲をとりくらすほどに、妄念はやむ時なきゆえに、心すずしく喜ぶことは、一生なきものなり。これは煩惱の相手になりてそれをやめてとしかかりたまう御こころばえなり、もとより喜ばれぬを不足とおもわせたまうゆえに、わすれずたえず喜ぶようにとて、喜ばるる道具をたすぬるようには思召さるること、これまた目出度御事に候。誰もさこそは思はるる事に候。さりながら御身のうえにとりては、折柄さるべき御所存とも覺えず候。天晴にこそなくとも、よく喜び、よく念仏してと願うは、御身すこしはよくなりてと思召す御心ばえになり候。まことに／＼けなく覺え候。

あわれ／＼その喜びもせず、念仏もおこたりたまうわろき御身を、それながらにて御往生候いて、本願の手柄のほどをこの度みせたまえかしと覺え候。勿論信心は歡喜を生ずれども、歡喜は往生のたねにあらずよりは、なんぞ喜ばれざるをなげかん。あながちになげくこそ、すなわち歎きにとどめらるるにこそ候え。

法然上人の云く、

「心のそみ／＼と身の毛もいよだち、涙もおつるをのみ信のおこると申すはひがことにて候。それは歡喜悲喜と

この心中をはかりみるにわれ信心のあるじになり、歡喜念仏の主になりて、信心歡喜の念仏を鼻にあてて、是にて往生を買いとるようには思ふから、もし弱きを見てはおとしめ、又もし少しよき時はやがて慢するなり。つまりわが方に往生の種をもち居て、ゆゆしき（立派な）信者とも行者ともなりてこそ往生はすれと、我方をはげまよりは、唯往生のたねは仏体なり、行者の方には、願ひとつも、行ひとつもなきながら、往生を得ることは、本願力とするべしかるがゆえに、願も行も、かつて行者の所作ならず、ただ他力とのたまえり。

二つには、歡喜念仏をもて、往生のたねには思ひげもなけれども、知恩の心かろきゆえ、歡喜せず、報徳の念かるきゆえに、念仏おこたれりと、これをかなしむ機あり。この機は、悲しめども往生を気づかわざるなり。さればこの歡喜は、法義の命なり。またこれ信心の色なるべし。もしこの歡喜なくば、安堵懈慢の人か。

又、弥陀大悲のむねのうちには常役の衆生みち／＼、又迷倒の心の底には法界身の弥陀みち／＼たまいて、南無の機を片時もはなれぬ阿弥陀仏なれば、三業不離にして、撰取決定と思ひ入りてんのちは、更に此方の勤墮にはよるべからず。歡喜には上もなし、極樂歡喜の証をまつべし。念仏にはきわまりなし、浄土において報尽すべしとおもう心

を力として大悲の御方に目をはなたすばよし。何のなげくことかあらん。

物くさく、法義手間のいる領解は、一向不便のことなり。ただ他方の撰取照護を仰いで、必ず御念仏候べし。忘るればとて、そのままおかんは事によるべし。ゆめく、大事にて候。

あじきなき老のねざめに、ひとり念仏したまわば、何となく心細くもおほすらんずれども、上品蓮台の眺ちかき御身に候えば、もはや今は身体も、世諦も、目にはかかるまじく覚え候。

あにはかりなきや、漫々たる生死、今生を最限とし、悠々たる凡身、今身を最後とせんはと、まめやかにいさみたまうにこそ、かくは知れども心のみじかきたげほども悦ばれず、又今にすて行くこの世ぞと思いきれども蓮の絲のきれはなれもせぬは御身ばかりの御歎きにはあらず。愛河の浪の底には沈みながら憂なく、火宅の炎の中に焼かれながら懼れもせず、夏の虫火を愛し、蚕の虫のみずから糸にむすばれ、籠鳥、鼎魚、かえりてたのしみと思ふ身なれば、たれくも皆この心ぞかし。歎喜にはきわもなし、たといよしとみゆる人もその身にはさぞ不足とこそ歎くらめ。さればたれくもみなこの分にて往生をとぐるとみえたり。くれく、撰取の床におきふしし、定聚の庭に起居する行

遺稿

病人の心

歎異鈔第三章に、「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」という有名なお話があります。一般にこれが歎異鈔を代表するお話であるかの如く考えられる程知れわたっておりまます。このお話は信仰上重大な意味内容をもっておりましようが、私は例によりまして、そのこととは大変はなれた、低俗な肉体的にひきあてて考えてみたいと思いません。

日常生活におきまして、全く健康な人でも他人様のお力ぞい、お世話をいただかなければならない場合は沢山あります。これは申すまでもないことでありまます。そしてうけたご好意に対しては勿論となたも心からの感謝の意を表しておられます。

ところで病人、この場合私自身についてのみ申上げるのといたします。私は今では病床に横臥したきりで、自分の病を養い自分の生命を維持していく体力が皆無というて

者なれば、正因はや満足のゆえに、たといおこたるともころよく、正行まさに増進のためなれば、つとめはげむも、いよくうれし。いたずらに穢の善悪を論ずることなかれ唯深重の大悲を仰ぐべし、といえり。

詮ずるところ、この世のことは露ほども御心につけ、取持たたまうことあるまじく候、仁義も、外聞も、みないたずらごと、臨終のよそおいなきあとの品々、一切の心づきはみな古郷の妄執なり。かく申すも手ゆるみ候。唯きわめて御念仏候べし。

御聴聞のためには、御文何ほども候に、子孫の催促をと候えば、いかがわしく覚え候えども、もしは御念仏のたよりと、又は別れてのちのなぐさみ草とも思い、仰せにまかせ候。言の葉はいやししく候えども、みな聖教の深き教えどもにて候。 亥八月 京 惠 空 謹言

浄安様

御披露の人々読みたまえ

△編者註△ 浄安とは恵空師の叔父君。この文は病床にある叔父君のもとめにより他力安心の極意を吐露されたものであります。これを福田鉄雄先生の御病床に、福田先生が筆写されて贈られました。福田先生は最後まで枕辺に常に置かれて、繰り返し随喜されました。

福田鉄雄

よろしいのであります。そして随分わがまま勝手な、独断的な考えをおこします。私こそ他の力をかりて生きるべき当然の有資格者と、甚だ勿体ない、大それたことを思うのであります。そこには何の自己反省もなく、むさぼりの心にみちた悪人の姿があるのみであります。終日終夜、瞬時もはなれず身辺で看護する家内をはじめ家族の者、お医者さん等に対し限りないサービスを要求しております。友人親戚、遠方にすむ友人知人、有縁の方々、さては縁もゆかりもない人々にいたるまで、そのお力の御同情にすがろうといたします。まことにさもし根性であります。これも私の只今の状態から申せば、どんなお叱りを蒙りましても、残念ながら一言の弁解も出来ません。

しかしこのように心から全面降伏し、徹底的に自分を投げだしておるならよろしいのですが、幾度も死を覚悟いたしましたのに種々の妄想がおこります。とくに死期を目前に控えた病状にたちいたる以前には、自分に都合のよいこ

とのみを考えたがりました。たとえば、どんな名医でも誤診がありうる、自分も誤診されてるかもしれない、とはかないことを思うたり、あるいは近く癌の特効薬が発明され自分もその恩恵に浴する幸運にめぐまれるだろう、と全くありうべからざる妄想をたくましくします。この虚仮なるものによろうとする心、信仰の方から申せば、雑行雑修自力のころにも比すべきものであらうと思ふのです。重罪人が死刑を宣告されるとまことに素直な信仰の人となるそうですが、更に裁判の結果無期懲役に減刑されるとトタンにもとの重大悪人の心にかえると申しますが、病人として反省させられる事柄であります。

私、深く考えた訳でもありませんが、病人にはまことに止むをえないことながら、三つの執着があります。

一つには申すまでもなく病氣そのものへの執着。次から次と限りなく妄想、取り越し苦労がわきます。しかしながらこれ等は全く何の益もございません。

二つには療法、治療薬等に執着する迷い。ありふれた病氣、難病奇病にいたるまで現代の治療界で承認されている療法は、大抵のお医者さんが常識として知っておられます。神秘的効果をあらわす療法や妙薬を掘り出す機会は絶無というてもよろしいとおもいます。インチキ療法にひっかかりぬよう心掛くべきでしょう。

三つには療法の結果に対し過大な期待を持つ執着。予期した結果があらわれぬと悲観します。自分で勝手に効果の予想をたてるのですが、思うようになれず、崩れ去る場合があり、全く無駄なことでもあります。

このような勝手な思惑、あせり、はからいを一切すてて周囲の人々にひたすらおまかせするよりほかありません。つまり「自力のころをひるがえし、他力をたのみたてまつれば云々」ということであります。そして自然にわき出てくる感謝の念、これを卒直にあらわすこと、これが今の私に出来る精々ただ一つの行とでも申しましようか。この問題なく当然とおもわれることでも、いざとなればなかなか出来ませんで、いつの間にか不足心がおきてることがしばしばであります。しかし感謝の念を忘れまいとして病床生活することは、それだけ病苦を軽減する効果すくないのであります。

最も身近かな人々からはじめ、有縁無縁の方々、あるいは生物無生物にまで及んで、その恩の深さを思いますときただ「不思議といわざるを得ません。「月天にあり、水地にあり」と申す如く、自分のまわりの限りなく沢山にある水玉には、月の光が宿っております。即ち如来のお慈悲がはたらいて私を育て、生かして下さっております。如来の分身である人々、物々に感謝せずにおられないのであり

ます。唯信鈔文意に「この如来、微塵世界にみち／＼たまえり。すなわち一切群生海のころなり。草木国土ごとごとく成仏すとけり、云々」と仰せられております。

私如き一生造悪、病弱者を無条件でお助け下さる如来の御恩を思うとき、感謝のお念仏をとえずにおられないのであります。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、

合掌

昭和四十年九月十四日

△追信▽

先便では大変未熟な拙稿をお送り致しました。もっと想を練って書きなおすべきであったなと思っております。若しお役に立つのでございましたら御添削をお願い申し上げます。

ご迷惑を更に重ねる次第であります。別紙「病人の心」どうも考えのまとまらぬ事を書きました。シドロモドロとはこのことでしょう。これをお送り申します。これもどうなるうとおまかせ致します。何ヶ月先にお掲載下さっても、没書にして下さっても御意のままでありませぬ。私何という罪の深い執念の深い男でしょう。面倒なお願いばかり致しまして……。

身体は骨と皮ばかりであります。お腹は腹水とガスでふくれあがって身動き出来なくなり激痛にたえておりま

す。随分とお世話を蒙りました。有難う御座ました。

九月十四日

癌を病む人へ

私は死期を目前に控えた消化器系統の癌者であります。

身体的な病苦を多少でも軽減出来る経験談を同病の人々に伝え得ないことを甚だ残念に思っておりますが、これも現時点に於いては誠にやむを得ません。

ただ一日も長生きしようと思ひ、型の通り栄養剤の点滴静注をうけております。牛乳、鶏卵、果汁等も長時間、胃中に停留するようになり、之等流動食に対する食欲も減退しました。私は性来酒類をたしなみませんが、いくらかでも栄養補給のためと思ひ、日本酒、ビール、葡萄酒等、醸造酒を適量にうすめて少量宛、酔わぬ程度に長時間かっす服用します。

ところで自分の心の問題として、精神的苦痛の克服を心がけております。健康体の人でさえ独力ではどうもならず他人の助力を得て事を運び、うけた好意に対して心から感謝しております。まして吾々の如く数センチの身の……

「……もし菩薩、種々の行を修行するを見て、善不善

の心をおこすことあれども、菩薩みな撰取す。已上」

私は「教行信証」を幾度も心をこめて読んだこともございません。まして研究など致したこともありません。ただ多くの先生方の御研究やご解説など読ましていただき、次のように了解致しております。

「教行信証」は二十一部の経、四部の論、三十八部の釈一部の外典という多数の文献よりの引用文が全巻の多くの部分を占めている。

しかも等の文は引用の趣旨、目的表示のためには、他の文をもってしてはおきかえ得ない場所に位置している。しかしこれ等の引用文は、親鸞聖人が法然上人の仰せをこらうむって他力の信心を頂かれて以来、如来の矜哀、師教の恩厚、仏恩の深重を一日一刻として忘れられることなく、日常生活に生かして味わわれての御自督、金剛不壊の大信心の底から迸り出た聖人のお言葉によって整然と融合調和されている。即ち「教行信証」は正信心仏偈の一句「如衆水人海一味」と仰せられてある通り、大信心海であって、大海は地上のあらゆる成分を溶解含有していると同様、この書も、他力信心の要諦真言の集大成された、信仰の書であると申されます。

御伝記によれば、親鸞聖人は家庭的には不幸な星のもとに生まれられたとあります。又比叡山にのぼられ修行を始

れば往生すると説かれたから、農民をふくめた庶民階級は勿論、藤原兼実の如き政治の主流から遠ざかり不遇であった少数貴族も皈依したのであります。

しかし教義を曲解した所謂「無智不善の輩」と当時の仏教会から称された者が、念仏門の信者のうちから出現したため、時の為政者の弾圧をうけるに至ったこともやむを得なかったとおもわれます。

為政者は悪人正機の宗教的意義を深く詮索せず、社会秩序破壊運動と簡単に断定したことと思われれます。親鸞聖人も受難者の一人でありました。

化身土巻に「主上臣下、法にそむき義に違し、いかりをなしうらみを結ぶ」と仰せられたお話は、念仏門弾圧の非道に對する精一杯の抗議と解すべきでしょう。しかし同時に当時の権力者、為政者の施政の態度の支離滅裂、無軌道に對する痛烈な批判の語とも受けとれます。源平争覇の闘争、骨肉相食む権力争奪の紛争に終始していた時代で、日本歴史上最も酷薄無残な時期の一つでありました。これに加えて天災地変凶作等自然の脅威が相次いで襲来したといわれます。

私は自分の表現力の貧弱さもかえりみず、親鸞聖人の御信心、社会観、世界観等を次のように考えてみました。それは多分に新しがってみたい、無理なこじつけで

められてからの二十年間、即ち人間形成に最も大事な期間も、必ずしも恵まれた環境で過ごされておられなかったと推定されております。しかし聖人は、その逆境に堪えられかえって一層の勇猛心をふるいおこされ、自力聖道の修行に精進され、かくして人間の限界なるものを見極めた境涯に達せられたものとうかがわれます。この御縁で法然上人にお遇いになり、その仰せを一度うけたまわっただけで、即得往生の信仰に頓入されたと推定されます。歎異鈔第三章の「自力のころをひるがえして、他力をたのみたてまつれば云々」のお話の中の「自力」の二字は、自力修行の経験のない私如きは、とても味わい得ない遙かに高次の心境と拝せられます。

法然上人が浄土宗を開かれた当時は、旧貴族と新興平家武士階級が権勢をほしのままにし、自分たちだけ善人階級であると勝手に独断していたと思われれます。これに反し食糧生産に骨身をけずっていた農民は、いわれなくして愚悪な階級として処遇されたでしょう。国民の食糧の確保こそ社会秩序保持の根源でありますから、その生産者が不当に待遇されることは極端な価値転倒時代とも申すべきでしょう。この時節に法然上人は弥陀の本願は一文不知の愚鈍の者罪惡深重な者をめあてであって、之等の人々は名号を称え

あ……△絶筆▽

昭和四十年九月

福田輝子夫人追記

此稿を書き始めましたのは九月十五、六日頃と申します。二三日でかけなくなりまして。夜半一時頃から朝六時までが一番苦しい時間だと云って、半身起して布団に依りかかり、一睡も出来ぬ苦痛の中に、お念仏をつづけて暁を迎える頃でございました。その苦しみの隙々に、少しづつペンをとっておりました。最後の原稿ですから字も乱れ、意味のつづかぬ箇所もあります。肝心の本旨に入れないうちにペンが絶えておりました、全力をしほって書いたらしく存じます。

「ここまでしか書けなかったが、お前が清書して送ってくれ」

と云い残して逝きました。今清書してみましたもこれからというところで終っておりますので、記事になるものやら、又、福田が同病の皆様にごいたかったことがお解り頂けるものやらわかりませんけれども、私は遺志を思いまして先生にお読み頂いておまかせ申上げ度いと存じます。

長年連添うて暮しておりながら、信心の浅かった私は限り無い悔いに涙にくれる許りでございます。

夫が難病に苦しみつつ、同じ悩みの方々には何を告げたか
ったのか、私には思い届かぬことでございます。
日一日と別れの迫るを悟り、苦痛の増すにつけても
看る私に

「苦しければ苦しみ、痛ければ痛がりするよ。それが
私の病気なんだからな。素直にしたがって、死ぬまで
生きてるよ。」

もう如來さまにおまかせしてお念仏だけさ」と
と云っておりました。

やがて一口水を飲んでもすぐ焼けるような、さすような
痛みだな、と吐き、腹水で張り切った身動き出来ぬ苦し
みの中にも、お念仏をつづけており、無意識状態になっ
ても口唇は称名に動かし、微笑してうなずいておりまし
た。

私には、夫が云いたかったことは、この病気で医学の及
ばぬ限界をさとした時、この世の別れの近づいたことを
さとした時、この病気の苦痛、心の乱れや、悲しみ、す
べて如來さまにおまかせして、一分一秒でも安心して生
きましようというのではなかったかと思うのでございま
すが、如何なものでございましょう。

歎異鈔の九章は、赤線が引いてくりかえし拜誦した跡が
あり、恵空師の安心消息（福島先生が福田のために謹書

ましてから、約二十五日間三十度前後の高温が続きまして
おかげで農作物は豊作であります。私如き病人は、食欲
著しく減退致しまして、すっかり弱りました。

八月十八日付のお葉書有り難く拝受致しました。色々
御心におかけ下さいまして恐縮の至りに存じております。

……私は最近、体力がなくなりましたが、病気の方は
どういうものかさして苦しいとも感じません。ただ夜中一
時頃から四時五時頃まで吐き気に苦しみます。これには本
当にまいってしまいます。しかし主治医には十数年かかっ
ておりますので、よく親切にしてください。主治医は岩手
医大での教え子でありまして、元岩手医大の講師をやって
おりましたが、五年前に開業されました。精神的に応援し
て無理に開業させましたら、今は非常にはやって、外来二
百人、入院三十人を一人でやっております。それで病室の
増築やら自宅の新築で、私を充分見舞いかねる忙しきで、
同級生を一人副主治医に頼み、二人で交替に見舞ってくれ
ます。主治医は私に、寝る時は右を下にせよとか、一度に
食物を多くとらず、少量宛何度にもとるようにとか、こと
細かに注意します。栄養剤の静脈への点滴注入とかを一時
間もかかってやってくれます。病人として私は頗る幸福な
方です。

輸血をするようにと云いますが、これは他人に迷惑をか

してお送り下さいました書は、日誌には喜んで毎日拜
読したらしく、心の苦しみの深かった頃もあったと存じ
ますが、それなればこそ同病の方々の苦しみもわかり、
何か申上げて自分のたどりついたところを告げたかった
のでございましょう。

「喜んでお先^{さき}させて頂く」と告別の言葉を残して参りま
したのですから泣かなくとも思いつつ涙が出てくるの
でございます。みとりの行き届かなかったすまなさより
も、側に居りながら御仏の教えを受け得ないで過した私
の愚かさに泣けてくるのでございます。

「それでいいのだ、これからでもいいのだ」と云ってく
れているような気もしてなおのこと泣けてくるのでござ
います。愚痴を申上げまして御許し願います。

福島先生への書簡

謹啓

残暑厳しうございます。先生、奥様さぞ凌ぎ難いことと
拝察いたしております。

当地は例年ならば今頃は秋風の吹く季節でございますが
やはり今年ほどこまでも異状でございます。昨二十八日
は本年最高の三十四度の猛暑でございました。今月に入り

ける事でありまして、それまでして生きなくともよろし
いと断っております。死ぬ時に死ぬのは、災難をのがれる
事であると、良寛さんが云うておりますから、無理なこと
はやらん方がいと考えます。

それは兎に角、私はまだ／＼死なないような気がします
私の亡父は六十才で胃痛でなくなりましたが、前年の七月
に癌の症状があらわれ、翌年正月三十日に亡くなりました。
これに比較いたしますと、まだ数ヶ月は大丈夫と思いま
す。亡兄は七十二才で胃癌で死にましたが、これは手術を
うけて、一週間目になくなりました。父も兄も癌ですが、
今のところ癌に対しては、昔も今も変わりございません。人
は何かで死ぬのは当然です。ただ私は御念仏を申して如來
の誓いを信じ、感謝して生きておれるのが何より有り難い
事です。

以上とりとめなく、出まかせに書き綴りました。頭も大
変弱くなったような気が致します。

敬具

八月二十九日

福田 鉄雄

福島先生

御 奥 様

二伸

以上は二十九日夜に認めました。只今三十日の朝一時、

例によりまして吐き気のために目ざめました。何時も考えることを次に述べます。

私は十八年間の病床生活の間、幾度もあと二ヶ月位とか長くて二年位の命であろうと医師から宣告されたと家内は申しておりますが、今日までどうやら生きて来ました。今度も同様であります。

兎に角、私は誠に心のさもしい人間とつくづく思うのであります。自分の病気を他の人々に吹聴して同情を求めようと致します。このさもしさは一生つきまとうことでしょうか。

又平生御念仏を有り難がっておりますのに、いざ死が間近かと宣告されたり、自分で思うと、今までの信仰というものがガラガラと崩れ去ります。

そして、ここで幾度も歎異鈔第二章の

「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり……云々」

と、第九章の

「念仏まうしそうらえども、踊躍歡喜のころおろそかにせうろうこと、またいそぎ浄土へまいりたき心のそうらわぬ……」

のところ。このほかに、淋しくてしょうがありませんとか

お先きマックラで困りましたとか、色々と付け加えなければなりません心持が沢山あります。しかし結局は

「よくよく案じみれば、天におどり地におどるほどによろこぶべきことをよるこばぬにて、いよ／＼往生は一定とおもいたまうべきなり云々」

と、よろこばぬにて淋しいので、お先きマックラなので自力の難った念仏は崩れるのでと、そこで如来の御まことごとどこまでもあわれと思召すのでと、お念仏申すほかありません。

御念仏の声は自分の声かどうか、ただ／＼もうろうとなります。名号不思議という御語、歎異鈔第十一章、これは有り難いことであります。

毎日の生活としては、一番身近の人々に感謝することを先ず心にかけております。家内と三人の孫達、主治医と副主治医、看護婦等、一日おきに見舞ってくれる小学校時代の友人、一週に數回来訪する親類の人々、先日は中学時代の病友が二時間ばかり昔話をしていききました。

これ等の人々に心から感謝をささげることが私のせめてものつとめであります。かくして段々拵けて万物への感謝私を撰取不捨の御利益にあずけて下さる如来様に感謝の念仏を申す事と、以上であります。

先生ありがとうございます。

奥様ありがとうございます。

長い間、御導き頂きありがとうございます。

如来様のお誓いを信じ、御本願に乗托する許りでありませぬ。この罪深い私がおたすけにあずかるとは何たる不思議なことでしょうか。なむあみだぶつ／＼。

ではおさきさしていただきます。

先生與様始め皆様お達者で。さようなら。九月十四日

初七日を迎えて

福田 輝子

夫、福田鉄雄、生前は一方ならぬ御厚誼を頂きまして有難う存じました。先生の深いお心からの励しのお言葉、慰めのおたよりの数々に依りまして病苦の中にどんなにか救われましたことか、ただ／＼涙が出るばかりでございます。

最後のお手紙は死の直前に読んできかせました。丁度白井成允先生からも頂き、二通を拝しましてしみじみと手に持っております。

何という御縁でございますでしょうか。深い／＼縁のありがたさを見せてくれました。心の平靜さはちつとも乱れずただ感謝と信心のあけくれで、笑顔で皆さまにわかれを告げてお先さして頂いたでございます。信じ参らせての最

後のわかれの手本を見せてくれたような気がいたします。

死後、告別の辞が、住所録の表紙裏に記してありましたが、平素尊敬をしておりました千原大哲先生が葬儀の際、御参列の方々に伝えて下さいました。

告別の辞

皆様なが／＼お世話いただきました。

御恩報謝何一つ出来ませんでした、受けた御恩の有難さは決して忘れません。ありがとうございます。

よろこんでお先さしていただきます。

遺言によりまして直ちにアイバンクに眼球を提供致し、二人の方が有効に受けて下さいました。遺骸も解剖いたしましたのでお役に立てたらと願っております。

本人は苦痛の中にあっても、終始自分は幸福だ、何にも思い残すことは無い、しやわせの中で先に逝くんだと、何にも最後の息も苦まず、スーと煙の消えるように、鐘の音の遠くなるようにわかれて参りました。今頃はお浄土でながい年月の病苦から脱し、安らかに生れ変わっておりますことと思えます。わかれの直前に、先生と白井先生、福島先生にお手紙でお礼申上げてくれと云いましたので、私が必ずさし上げるからと云いますと、うん／＼とうなづいて喜んでくれました……

九月二十八日

菜園の家

福島政雄

菜園の家は福田鉄雄君の住宅であった。

此の住宅を何度訪れたか、私の記憶ははっきりしないけれども、最後に訪れたのは昭和二十六年十一月五日であった。十六年前のことであつて福田君は既に病床の人であつた。この時君は既に余命二年ぐらゐであるうと医者から申渡されていたが、落着いてその事を物語り、ただ現在に生きてゐることを感謝していた。君は実にその当時から生死の問題について衷心の解決を得ていたのである。

その後君は折にふれて感想を私に送つた。多くは長い手紙であつて信仰問題を中心にしたものであつた。私が最初に深く感じたことは、君が近角常観先生の「歎異鈔講義」を読んで深く味わつていたことである。此の中には先生が御父君の御臨終のことを次のように書いていられる。

「私の親は平日仏の御恵みを喜んで居られたが、ます／＼南無阿弥陀仏々々々々と念仏を喜びつつ、如何にも平穩に念仏の息が絶えて、極楽に往生して下さつた。そ

の様子は恰も障子を明けて這入る姿を後から眺める如く思われ、如何にも真実証の極楽世界の有様を此世から眺めさせて頂くことが出来ました。」

福田君は此処を十分に深く味読したと思われる。此度の君の臨終は正に此のとおりであつた。

十六年の間私は折にふれて色々に君を慰めることを心かけた。恵空師の安心消息を私は大変に有りがたく感じていたので、その全文を筆写して君に送つたこともあつた。また私の富士の歌を書いて送つたこともあつた。君はその都度大変に喜んだ。信仰の問題について私はあまり書き送る資格も無いのであるが、時折は手紙に書いたこともある。それに対する君の返事はいつも熱心な求道の心持を書いたものであつた。

此度の死期が迫つてからの君の心持はいよ／＼純一になつて来た。苦しい中から幾通も私や家内への手紙やはがきを書き、その信心を述べたのである。お念仏ただ一つに落

着いた往生、まことに有りがたいことである。

君は旧制二高の出身、私が三十才の頃、二高でドイツ語の講師をしてゐた時の二高生であつた。その時以来今日まで殆んど五十年、私が知つてゐる限りでは二高出身の優れた人物の第一位に列する人であると感じてゐる。その人今は此世に無く、私は実に淋しい。

「たとい未来の生処を弥陀の報土とおもいさだめ、とも

に浄土の再会をうたがいなしと期すとも、おくれさきだつ一旦のかなしみ、まどえる凡夫としてなんぞこれならん。」

口伝鈔の此のお言葉がしみじみと心に染み込んで来る。

私は君を先達としてなお数年の残生を念仏の求道者として辿つて行きたいとおもう。

(十月十五日稿)

福田鉄雄氏を悼む

白井成允

福田鉄雄氏も遂に逝かれた。十数年にわたる長い静養の後、自ら痛を病むと悟られてから凡そ半年の後に。

氏は私の亡弟武と盛岡中学校及び第二高等学校で同級の誼をもつておられた。殊に二高時代には共に道交寮に宿つて仏法の育みを受けられたらしく、恐らく阿刀田令三・福島政雄先生がたに導かれて、近角常観氏の慈教に浴されたことであろうかと思ふ。こんなに親しい縁をもちながら、実は私は氏と余り屢ばお遭ひした記憶をもたない。武と同

級の友であられたという事さえ、最近になつて慈光誌に掲載された氏の文章で始めて知つたので、どうも私の薄情な性格の暴露された事として余りに恥ずかしい。

一昨年夏十日ばかり帰郷した時、一日、氏の静養の居をお見舞いする予定を立てておいたのが事に碍えられて果たし得なかつた。いかにも残念だ。

然しこんな事はすべて私の愚痴の繰言にすぎない。氏の久しい求道と長い療病との間に到達せられた浄土真宗の信

心は、まことに金剛不壞の相をあらわし、晩年にいたたい御手紙の一字一句の中にも遍く滲み出ている。私はそれを死蔵するに忍びず、其の一通（八月三日附のもの）を私の自照誌（十月号）に掲げようとした。けれども其以外にも氏の尊い御手紙が遺っているので、今、花田師が福田氏追悼の為に慈光誌の特輯号を編んでくださると承って、師のまことに厚い御情に随喜し、これら三通をそのまま師に御覧いただいで編輯の資に供えたく思う。

中に就いて四月二十七日附のものの中に福田氏が教行信証を読みたいと願っておられる一節がある。私は之をいただいた時、氏の健康がまだかなり剛く机に倚るに堪えるもののように想像し、極めてのんきな返事をさしあげたことを憶いだす。然し其から数日後には氏は既に痛におかされたことを自覚されたのであることをずつと後になって知った。金剛の信心に立ちつつ、一息存する間はひたすらに法を聞こうとする氏のとうとい心境が窺われる。

その心境は九月十四日附の最後にいただいた葉書に更に明らかに現われている。後から思えば、之を私が拝見していた時には、氏は既に安祥として浄土に往生せられた後であった。命且夕に迫る中からこんな消息を自ら書いてくださった御心の中、ただ涙を以て偲びもうすのみである。その文に曰く

福田さんをおくりて

岩 本 正 樹

『自照誌九月号正信傳私解の御文章、有難く拝読させていただきました。之は私にとりまして最後の御教化でございます。五十年にも及ぶ長い間の御導頂きまことに有難うございました。唯信鈔文意は、私よく解らぬ乍らも平素読ませて頂き、何かと愚見もわいてくることでございました。この度先生の御懇切なる御解説によりよくわかりました。「ユノ如来微塵世界にミチミチタマエリ。」身辺の人々、有縁無縁の方々、草木国土、生物無生物のまごころに接し、ただ驚き、感謝のほかありません。煩惱にまなこざえられましても、「阿弥陀仏此ヲ去ルト遠カラズ」の仰せの如く、慈光の耀きはこの壁をやぶりとどいて下さいます。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。』

此の最後の消息をありがたういただいて他に何も申すこととはない。（ただここに御教化とか御導きとか言っておられるのは、私がどうこうという事ではなく、氏がお念仏もうすとき一切の衆生の上に仏恩を感謝しておられた事のおずからの表現である、とありがたくいただけける。）

故郷盛岡の秋色漸く深いであろうと懐かしい。

（十月七日）

（第一信）

今日福田鉄雄さんの御永眠の報に接し驚いているところです。こんなに早くお別れするなんていうことは思いませんでした。先月の「慈光」誌上でも、静かに人生を語って居られました、自分も痛だそうだ、医師がそう言うから、といったようなことを落付いて話して居られるので、私は福田さんに手紙をあげ、私の書いたものを差上げたら、その返事にも、何処の部分にできた痛とのお知らせもなく、他人事のように話され、私の書いたのも面白く読んだと言っておられるので、そんなに早くお別れするなどは思われず、そのうちお目にかかるからと無責任な手紙を出したりして面目なく思っております。

しかし苦惱の旧里は捨てがたく安養の浄土は恋しくないので人間でありますから、福田さんが静かなお手紙を下されたにつけても、何程かお淋しいことでありましたろうと奥様に手紙を出しました。今生にて悟りを開くということ

は私たち凡夫にはできないことでございます。

私は福田さんとは第二高等学校時代には仏教主義の道交会でいつしよに暮しました。そのおかげで近角先生のお導きをいただきました。福田さんは一貫して念仏の行者でした。十八年の闘病生活で、どんなにかお念仏をよるこんでお暮しになったことでしょうか。

戦争がはじまった頃と思いますが、大阪の塩野義につとめておられました福田さんが、久しぶりに仙台に來られたので、私達で歓迎会をしました。そのあとで仙台の中心部の芭蕉の辻というところで福田さんが、何だか寒気がすると言われたように私は記憶しております。月の美しい晩であつたようです。

その後でした、福田さんは塩野義を止めて故郷で静養しながら、盛岡の医大の薬局長をされたのは、それから私も時々お目にかかり、私の書いた本なども読んでいただいております。

信仰の篤い人の典型とでも申しましようか、いつも静かで、微笑を浮べて、温かい心で人に接し、人と話しておられました。ほんとうに偉い人という思いでいっぱいです。福田さんの務めて居られた同じ医大の病理学の教授に、内山泰という人がおられました。同じ道交会で私たちと親交を結んでいた人ですが、終戦前に胃癌でなくなられました。松島瑞巖寺の盤竜老師の高弟でしたが、余命いくばくもないことを知ってからは、常に歎異鈔を拝読し、自分の教えている学生たちを集めて歎異鈔の講義をしておられました。私がお見舞にまいりました時は、胃癌は非常に進んでおりましたけれども、談笑して別れました。今生の悟りは凡夫にはできないまでも、いつでもどこでもお念仏が救って下さることを知らせて貰います。

私など悪性の強い者、宿業のあさましき者ということがひしひしと思ひ知らされます。内山さん、福田さんのように心が静まるひまはありませんけれども、お念仏は私の力になって下さいます。気が狂うようになることもございませぬ。淋しくて泣きあかす夜もございませぬ。しかし、いつもお念仏が私を抱いて下さいます。そして福田さん、内山さんたちが私に話しかけて居て下さるように思われます。お念仏に生きられた先輩たちが、お念仏だよ、お念仏だよ、と呼んで居て下さいます。

「それがだいたいじゃない」と言って私達に話しかけておられる先生の慈顔も浮んでまいります。

いずれの行もおよびがたき身、ただお念仏のみが、この世の光であり、力であります。

近角常観先生のお六字の名号を拜んで泣けて／＼仕方がありません。

九月二十五日

(第二一信)

……昨日、盛岡の県立病院長の桂教授に会いました。桂さんも福田さんと一緒に道交会に居られた人ですが、桂さんの話では福田さんの病氣は胃癌であったそうですが、死が迫って来ても、平常とすこしもかわらず、訪ねて来る人たちとも、いつもの笑いをたたえて話しておられたそうです。

この微笑は、私も常に思い浮べることができません。あたたかい微笑です。最後に呼吸がとまるまで

「皆さんに心配をかけてすまなかった、大変お世話になりました」

とあつく礼をのべられたそうです。

桂さんのお話では、丁度内山泰先生と同じく念仏をよることでこの世を去られたとのことでした。本当に信仰の尊いことを福田さんは私たちに知らせて下さいました。私を

私は終戦の時、病院を焼かれ、それから、あつちに移りこつちに引き越し、名利愛欲にひきずりまわされてる間に近角常観先生からおさげ下さった、先生直筆のお名号の掛軸をどこにやつたかわからずになりましたが、近頃何彼とお念仏がしたわれてならなくなっているところに偶然近角先生のお名号が出て来まして、勿体なきこと、嬉しいこととさつそく書齋にかけて拜んでおります。苦しきにつけ、淋しきにつけ近角先生は名号となって私にあたたく話しかけて下さいます。

「人生は苦なり」と釈尊がとおかれたのを、それは人ごとの様に聞き流しておりましたが、ほんとうだ、そうだ、それしかないと思ひ悩むにつけ、先生の六字の名号があらから私に話しかけて下さいます。

「そのお前が可愛そうだ、気の毒だ、お前を救わておくものか」

と、掛軸の中に近角先生のお言葉が聞えて来ます。ありがたいことです。

私は只今、福田さんの御永眠の報せを受取りまして、福田さんの奥さんに手紙を書きながら、昔福田さんと一緒に近角先生のお話をきいた時のことを思い出しております。福田さんは私にとってはよい善知識でありました。静かなあたたかいお顔が私の眼前に思い浮ぶにつれ、近角先生の

大いに力づけて下さいました。信は力なりであります。

「オネガイダカラ、スゲキテオクレヨ」という仏様のお呼声をよるこんでお浄土にかえられたことと思ひます。

福田さんは、本当に私たちの先達であります。力であります。私は福田さんのように勇んでお念仏はできませんけれども、福田さんを思うとき、お念仏を唱えさせていただきます。苦悩のこの世を思いつつお念仏させていただきます。そして生きる力を与えて貰います。

私は、よろこび勇んでお浄土にまいらせていただくことは出来ませんようですけれども、お念仏の尊さ、力強さを福田さんからよく知らせて頂きました。私の部屋の近角先生の六字の名号は、生きた力となって私に話しかけておられます。そして福田さんも一緒に力を与えて下さっております。

十月六日

良寛師詠

忘れては驚かれけりもみじばの

久方の雲のあなたに住む人は

常にさやけき月を見るらん

思うまじ思うまじと思えども

思い出しては袖しぼるなり



あとがき

今年はずばやに冬が訪れました。さて今月号は福田先生の最後に放たれました信徳を中心に、先生方の追悼のお言葉を頂いて編纂いたしました。

近角先生の「病床慰問の書簡」は、安波敷八医師の癌疾不治の病床に送られましたもので、今回も、福田先生の御病床に筆写申して、おとどけいたしました。歎異鈔九章の切々たるお味わいであります。

恵空講師の「安心消息」は福島先生が、福田先生の咯血の重症の病床に書写なされおくられましたものであります。常に枕頭に置いて繰り返されました由であります。

福田先生の御遺稿で、終りの「癌を病む人へ」の稿は遂に本旨に入られる前に病勢悪化し擱筆せられましたものであります。私共は病氣すれば、治癒することばかりを考えますが、必ず一度は医学の限界を越えねばなりません。そこに何一つよるべもな

く死の深淵に一人で進まねばなりません。そこに「生けらば念仏、死なば浄土」と生死をつらぬくまことのひかりの支えなくしては、一切は崩れ去るのであります。

福田先生は薬学の研究を生涯のお仕事とされつつ、その薬のすでに効力を失う重病になられて、そこに不滅の仏光を仰がれてしずかに「ではおさきさしていただきます」と言いのこされて浄土へ還られました。

この尊い御体験こそ、何時までも、何一つよるべなき私共に、真実のよるべをお生命にかけてお示し下さることであります。ここに道あり、ここに光ありと、力強くお教え下さいましたことを深く謝しまつるばかりであります。

○

福島先生と白井先生から、福田先生の病中の御書簡数通拝読させて頂きました。血の最後の一滴まで、道を求めて止むことなき御姿に、懈怠の身をゆりさまして頂くのばかりであります。紙数に限りがありまして皆様にお読み頂けないことをおわび申し上げます。

御案内

※毎月第一、二、三日曜、午後一時半

一道会例会

市電、新郊通り一丁目下車、東へ一丁半

※毎月廿四日、午前、午後、

昭和区小桜町教西寺、法話会

市電、御器所通り下車、桜花学園の東

× × ×

定価 半年 二百円(送共)
 一年 四百円(送共)

編集・発行人 花田 正夫
 名古屋市南区駈上町二ノ八八
 愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷人 本田 政雄
 名古屋市南区駈上町二ノ八八

発行所 慈光社
 振替口座名古屋一〇四七〇番

慈光第十七卷第十一号 昭和四十年十一月十五日発行 (毎月一回十五日発行)
 昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可